

## 海外ボランティア体験学習プログラム（通称：MOP）について

### 1. はじめに

本プログラムでは、海外でのボランティア体験を通じて、参加学生が日本や世界が直面する課題について考え、成長する機会を提供することを目的としている。具体的には、事前学習や事前課題から始まり、アメリカでのボランティア体験（アメリカ・ホープカレッジとの協働）に参加し、最終目標として11月の報告会の開催と報告書の作成をもって終了となる、サービス・ラーニングの構成要素を多く取り入れた体験学習プログラムである（単位認定はなし）。主たるターゲットは1、2年生であり、プログラム終了後に社会の様々な現場で活躍することを期待している。今年度は書類選考、面接を経て2名（英文学科2年男子1名、社会福祉学科1年女子1名）の参加を決定した。

### 2. プログラム概要

本プログラムは、本学と最も交流の古い協定大学であるアメリカ・ホープカレッジの協力のもとで実施しているもので、今年度で3回目となる。今年度の実施概要は以下の通りである。

日程	実施内容
第1回オリエンテーション：6/28@白金	プログラムスタートオリエンテーション 提出課題の指定：ボランティア学聴講とレポート、文献購読とレポート、自己紹介文
第2回オリエンテーション：6/28@浅草橋	ボランティア活動参加（特定非営利活動法人セカンドパーベストジャパン） ※活動後、振り返りとレポート提出
第3回オリエンテーション：7/26@白金	指定課題に基づくグループディスカッション（学生スタッフ、前回参加学生参加）
渡米（8/11～9/2）※8/17までプログラム担当コーディネーターが同行）	アメリカ・ミシガン州・ホランド（滞在：ホープカレッジ学生寮及びホームステイ） ・ ボランティア活動参加（スープキッチン、高齢者施設、フェアトレードショップなど） ・ 施設訪問（高齢者施設、病院、ホスピス、低所得者支援施設、教会など） ・ その他（日本語クラスティーチングアシスタント、開講科目の受講、フィールドトリップなど）
第4回オリエンテーション：10/8@横浜	帰国後ミーティングと報告会の打ち合わせ ※その後、個別カウンセリング実施及び10月～11月は合間を縫って予行練習を兼ねた発表とディスカッション
報告会（11/19@白金）	ボランティアファンド学生チャレンジ賞受賞団体中間報告会との共催 ※個人発表及び全体発表
報告書（12月）	執筆、添削期間を経て完成
第5回オリエンテーション（1月@横浜）	アンケートの提出と、最終総括

### 3. 今年度の成果と課題、今後の展望について—参加学生の様子と外部評価からの考察—

今年度は協働体制の見直しにより、前年度まで実施していたイギリス・レスター大学とのプログラムが中止となり、参加学生数が2名と少人数になったこと、前年度に続き、正課プログラムとしての位置づけ問題が解決できていないことから、構造的に学生たちにとっても参加しにくい条件であることから、約半年間にわたる学生のモチベーションの維持が懸念された。しかし、参加人数が少なかったことで逆にきめ細やかなコミュニケーションをとることが可能となり、プログラム担当者（筆者）を含めた3人の信頼関係は非常に強固なものになった。また、今回ようやくプログラム担当者が現地（アメリカ・ホープカレッジ及びホランド・コミュニティ）を訪問することができたことから、プログラムコンテンツの特色を「地域」、「高齢者福祉」、「キリスト教」と明確化することができ、現地スタッフとも今後の展望と課題について具体的に協議することができた。そして、アメリカでの後半2週間のプログラムを省いた全期間を通して学生に同伴でき、その都度振り返りやディスカッションを実施したことから、学生たちには自然とメモを取る癖が身につき、傾聴力、そしてアウトプット力は格段に上達した。そんな彼らは、自分の変化について、「大学に入学した1年間は無気力で、何もしなくて過ぎてしまった。2年生からは心機一転がんばろうと思ってこのプログラムに応募したが、これがきっかけで自分の殻が破れたと思う。また普段のレポートは出して終わりだけど、このプログラムは添削までしてもらえたり、全体においてとても鍛えてもらった。事前学習もとても役にたった。事前学習でまとめた内容やディスカッションの経験をもとに、アメリカで受けた講義の中で自分の考えを発言することができた(2年男子)。」、「国際交流センターが主催する海外プログラムは単位が取れるけど、2年生以上からしか参加できない。単位にはならないけど内容は充実しているし、1年生になった直後から参加できるこのプログラムは、私にとって大きな影響を与えました。この大学に入ってよかったと思えたり、授業や、大学生活に対する姿勢が変わりました(1年女子)」などと語った。それを裏付けるかのように、アメリカで大変お世話になったホープカレッジの教員から、「二人の変化には毎日驚かされました。海外に出ることは、新しく自分が生まれ変わり、自分を見つめなおしてまた日本で活躍できるきっかけになるのですね。ホランド・コミュニティにおいても、貴学の学生の評判は非常に高いですよ。」、また、日本での事前学習でお世話になったボランティア学の教員からも「このプログラムがきっかけなのか、1年生の女子学生が、秋学期(後期)に私の授業を取ってくれました。その授業は毎回様々なフィールドで活躍されている外部の方々をお呼びしてお話いただくもので、履修している学生も1年生から4年生まで幅広くいるのですが、彼女は1年生でありながら積極的に手を挙げて質問していますよ。この前はゲストにアメリカでの自分の体験や考えを話していました。」といった内容のフィードバックを頂戴した。また、このプログラムの集大成である報告会では、参加学生たちは、学長をはじめとする本学の教員らや在学学生、他大学の学生や教員、地域の方々の前で、堂々と発表した。プレゼンテーションは、全体発表としてプログラムの概要を5分のオープニングムービーとしてまとめて二人で発表し、その後はそれぞれが個人発表を

行った。2年男子学生は「キリスト教とボランティア “What is volunteer?”」というタイトルで、キリスト教について具体的に知らないにも関わらずイメージだけで毛嫌いしていた自分が、アメリカでのボランティア体験や生活を通して、キリスト教の持つ力と魅力に気づき、キリスト教とボランティアの関係を、「教会」と「信条」から考察して偏見から魅力へと変化した自身のキリスト教観を整理した。その上で、今回の変化を引き起こした要因は、「関心を持つこと」であったこと、今回の経験を通して日常の中において無意識に様々な境界線を作ってしまう可能性と危険性について訴えた。1年女子学生は、「海のむこうで拾ったモノ」というタイトルで、今回の訪問地であるアメリカ・ホランドと、本学の所在地である東京都港区の高齢者、そしてホープカレッジと本学の学生のそれぞれを取り巻く環境とボランティア意識について比較し、「老人力」と「学生力」の重要性を訴えた。そして、この二つの力が交わることによって地域が活性化していくのではないかと、そのためには学生たちが「学生力」をあげることが重要であることを提案し、自身についても「学生力」を向上させるための抱負を発表した。このように、学生たちは自分たちの体験と経験を、自身の言葉で力強く紡ぎ、発信できるようになっていた。来場者アンケートからも、「クオリティーが高く驚きました。ただ外国に行くことは誰でも出来るけど、ここまで吸収してアウトプットできるのは、正直凄いと思いました」、「パワーポイントがきれいにまとめられていた。自分と同年とは思えなかった。立派な発表だった」、「無関心ではいけないこと。今の時間を大切に貴重な体験をすること。両方ともに納得できて、関心をもつことができました」、「とても濃い体験をよくぞここまで簡潔にまとめあげたなと感動しました」、「自分も一歩踏み出せない1人だと思った」などの反響を多くいただいた。これらはこの半年間のうちのほんの一部の紹介であるが、このプログラムの到達目標として目指した、「参加学生たちが、思考力、行動力、発信力、コミュニケーション力、語学力などの様々な社会現場で貢献できる基礎的な総合力を身につける」機会提供の役割と、教育効果の役割を果たしえる手ごたえと確信を得ることができたと考える。

以上から、本プログラムは「学生の、大学生生活の充実のきっかけと一助となる」、「学生の基礎的社会的力の養成が可能であり、学生の潜在的な可能性を引き出すことができる」、「参加学生だけではなく、他の学生に及ぼす peer education としての役割も果たすことができる」といった意義があると考えられる。また、協働パートナーであるホープカレッジは、同じキリスト教を教育理念の礎とする大学で、校風や学生の気質など雰囲気が本学と非常に似ていること、また、大学の所在地の地域性や雰囲気（ホランドと港区白金）も非常に似ていること、ボランティア活動にも活発に取り組んでいることから、本プログラムのコンテンツと構成を、本学の地域性、学生の特色、建学理念といった、本学の特色を存分に取り入れ、反映させることが可能である。このような現状を踏まえた上で、今後は学生が参加しやすいような構造的課題の解決と、学内評価の確立と学生周知の促進のための、正課プログラムも視野に入れた位置づけの明確化の問題について、大学全体レベルでの早急な検討と結論が望まれている。

(李)